

## 多様性に対応できる学校（4）

### — 新たな時代に求められる教員の専門性 6 K —

企画者	菅 拓哉（朝霞市立朝霞第一中学校）
	杉田 明浩（川越市教育委員会）
	櫻井 康博（埼玉大学）
司会者	内藤 理絵（さいたま市立本太中学校）
話題提供者	佐藤 穂高（埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校）
	園田 力斗（入間市立狭山小学校）
	渡邊 文俊（埼玉県立熊谷特別支援学校）
指定討論者	長沼 俊夫（日本体育大学）
	細谷 忠司（十文字学園女子大学）

KEY WORDS: 多様性 専門性 6 K（経験 勘 根気 根拠 共育 協働）

#### 【企画趣旨】

6 年前に新設された埼玉大学教職大学院の櫻井研究室は全員現職の教員で構成され、修学時は特別支援学校の教員が 3 名、中学校の特別支援学級の教員が 1 名、そして中学校の通常学級の教員が 2 名である。現職としてのそれぞれの実践を生かし、多様性に配慮できる柔軟性のある教育について研究することで、理論と実践の往還を目指している。

現在の学校現場は、GIGA スクール構想やコロナ禍により、大きな変化を求められている。その一方で今まで大事にしてきた教育の根幹も重要である。このような「不易と流行」を特別支援教育においても、今一度見直す必要がある。そこで対象者を限定せずに、様々な子どもたちに必要な支援をする支援教育を考えてきた。各学校現場においては個の特性に応じた指導技術や組織的対応に課題が多く見られていることがわかった。

これらの課題を受けて、3 年前のシンポジウムでは、すべての教員が特別支援教育への理解を図り専門性を高める学校作りについて議論を深めた。2 年前は、中学校での実践に絞り、子ども達の多様性に対応するための教育実践を提案した。昨年度は、子ども達と教員の「多様性」、チームとしての「協働」に焦点をあてた。その結果、この 3 年間の発表を通して教員の専門性として 6 K が大切であるという認識に至った。今年度は、新たな時代の教員の専門性について 3 つの話題提供を行い、研究を深めたい。すべての教員が当たり前に子どもたちに必要な支援ができるように、「Special support から All needs support へ」を探求し、身についた専門家として教育実践にあたる学校をめざしたい。

#### 【話題提供者の趣旨】

##### 1 多様性を受容できる教員のチーム作り

特別支援学校は、TT による教育実践が多いが所属校では、教員の多様な視点を実践に繋げる難しさを課題としている。そこで、多様な視点を持つ個々の教員が協働し、児童生徒を支えるチーム作りを目指して実践を行った。具体的には、①実態把握や指導において大切にしたいことを教員の強み(価値)としておさへ一覧にする。②その一覧をツールとして活用し、会議の際、関心のある視点で発言の活性化を促したり、意識が向き難い視点を他教員の視点で補完したりしながら、話し合いがなされるようにする。この活用の結果から、教員が同僚の多様性を受容することと、あわせて、子どもを支えるための協働のあり方について 2 年間の実践を報告する。  
(佐藤 穂高)

##### 2 子どもの主体性を伸ばす指導計画の在り方

学習指導要領の改訂と全面实施に伴い、各校においてカリキュラム・マネジメントの実現を目指すことが求められている。つまり、【何を学ぶのか】・【どのように学ぶのか】・【どのように支援するのか】などの教育課程の軸となる枠組みを改善・充実していかなければならない。しかしながら、急速な社会の変化に伴い、児童生徒の教育的ニーズは多様化・複雑化している。新たな時代において、我々教員は児童生徒一人ひとりにとっての自立と社会参加を想像し、教育活動を創造していかなければならない。

そこで、児童生徒の明るい未来を共に創っていくために、教員は自身の専門性をどのように捉え、実践していくことが必要なのか検討した。本実践では、児童生徒の『願いや思い』に着目し、本人・保護者、関係諸機関と連携した授業システムによる特別支援学校の実践事例について報告する。

(園田 力斗)

##### 3 理論と実践の往還と「学び続ける教員」—教職大学院での学びと日本特殊教育学会自主シンポジウムでの発表を通して—

平成 24 年の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「教職生活全体を通じて、実践的指導力を高めるとともに、社会の急速な展開の中で知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探求力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である」とし、学び続ける資質能力を有する教員を求めている。

教員の資質能力は、長い年月を経ても有効で普遍的なものがある一方でそうとも言えないものもある。むしろ多くのものは変化したり、新たなものが求められたりするようになる。国際化や情報化、喫緊では新型コロナウィルスによる生活様式の変化に伴う学びのスタイルの変化など児童生徒や学校を取り巻く環境が多様に変化している。教員は学び続ける職業人として、資質能力の向上を図らなければならない。

本発表では、6 年前に新設された埼玉大学教職大学院での学びから、日本特殊教育学会自主シンポジウムでの発表事例を通し、「学び続ける教員」について報告する。

(渡邊 文俊)

(KAN Takuya, SUGITA Akihiro, SAKURAI Yasuhiro,  
NAITO Rie, SATO Hotaka, SONODA Rikito,  
WATANABE Fumitoshi, NAGANUMA Toshio, HOSOYA Tadashi)